

押絵と旅する男

江戸川乱歩

内容理解

この文章で作者は、押絵を見せる男に兄の身の上話を語らせ、「私」も読者も、のぞきからくりを見ているように感じる、不思議な物語を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

魚津の浜で生まれて初めて蜃気楼を体験する。

・膏汗^{あぶらあせ}のにじむような、恐怖に近い驚きに撃たれる。

・遙かな能登半島の森林が、食い違った¹の変形レンズを通して、すぐ目の前の大空に、曖昧に、ばかばかしく拡大されて、見る者の頭上におしかぶさってくる。

・通り魔のように、人間の心をかすめ冒す、一時的²の類いであつたらうか。

魚津から上野への汽車内で押絵をのぞく。

・たった一人の先客は、極彩色の絵が描かれた額を、風呂敷に包む。

・不気味な風貌で、西洋の³のそれは、外に向けて窓に立てかけてあつた。のような風采の男が怖くなってくる。怖さが身体中に満ち、たまらなくなつて、その男に近づき、向き合つて腰を下ろす。

・思わず「見せてくださいますか」と言つて、奇妙なものを見る。

・極度の⁴で描かれた御殿のような背景で、振袖の美少女が男にしなだれかかっているという画面。相手の男は、洋服を着た白髪の老人だった。

・巧緻を極めた押絵の細工。押絵の人物は二人とも生きていた。

・双眼鏡で見るよう勧められる。老人の悲鳴、「いけません。それはさかさですよ。」

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

利那（六九・上6）

遠近法（七三・下13）

巧緻（七四・下8）

挙動（七五・下17）

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。

〈着目点…押絵の中の老人の表情〉

老人との別れ（山間の小駅で、老人は、こここの親戚へ泊まる、と言って下車し、背後の
10
へ溶け込むように消えていった。）

←

・娘はいつまでも若く美しいのに、人間の兄は年をとる。兄が気の毒でならない。

色を見せた。三十年経つて、変わった東京を見せるために、今、旅している。

旅行をした。押絵を窓に立てかけ、睦あう二人に景

吉三の代わりに嬉しそうな顔でお七を抱きしめていた。

の中へ忍び込み、

・兄は、八百屋お七ののどきからくりの中に娘を見つけ、さかさにした双眼鏡で自分を

いることを打ち明ける。

内を眺め廻している。兄は、一月ばかり前、ここから眺めた一人の娘に恋わずらいして

・痩せ衰えた兄の奇行を心配して跡をつけると、浅草の凌雲閣へ昇り、頂上で双眼鏡で境

押絵の中の白髪の老人の身の上話

の相を表し、悲痛と恐怖との混じった異様の表情をしている

顔が上気している。娘の方へ手を回す老人は、
 そうな形でありながら

古風なプリズム⁵

の玉の向こうには、別世界があつた。娘は生気に満ち

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・蜃気楼という自然現象はどのようなものか。

・教科書七九ページ注20「浅草の十二階」の説
明にある「ランドマーク」とはどのようなもの
のか。

・エドガー・アラン・ポーには、どのような作品があるか。

謎解き